
ホラー短編シリーズ(脳関連を除く)

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホラー短編シリーズ（脳関連を除く）

【Zコード】

Z0926Z

【作者名】

脳好き人間

【あらすじ】

ホラーの短編集です。

僕はどうしても、ホラーを書くと脳方面に向かってしまうので、意地でも脳に無関係なのを書いてやる。と思つた次第です。

墓、墓つて、怖いよね。だって、人の骨がたくさん収納されてるんだよ。

最近、若い女の人がさ、いつつも墓参りに来てるんだよね。それも夜遅く。

それでさ、面白いことに、墓に話しかけてんだよ。あははははは。超おもしれー。

墓に話しかけるって、マジで頭おかしいんじゃないのか。だって、物だぜ物。

物に話しかけるとか、マジで笑える。つーかさ、その話しかける内容も、めっちゃおもしれーんだぜ。

「私を一人にしないで」とか、「どうして死んじやつたの?」とかさ、いやいや、一人が嫌ならお前も死ねよ。

後追い自殺する勇気もなく、恋人のことを忘れる勇気もないからつて、無駄に墓参りなんかに来やがつて。

ふつ、まあ、「どうして死んじやつたの?」って質問には、俺でも答えられるけどな。

だつてさ、そいつ殺したの、俺だもん。ふつ、ははははは。やつべー、超樂しーよ。くつ、マジ、笑いを堪えるの、あつつ。

いやー、それにしても、墓つていいよな。指名手配されても、安心して暮らせるし。警察だつて、わざわざ墓の中身まで探さねーもんな。

それにさ、あのバカ女のおかげで、飯にもタバコにも困らねー。ま、まさか自分の供え物が、恋人を殺した犯人の晩飯になつてるとは思わねーだろ? はは、あはははは。

「……それじゃあ、また明日」

バカ女が帰つて行く。よし、お食事タイムだ。

今日は、すげえ豪華だな。まさか、毎日供え物が無くなつてのを見て、死んだあいつが食べてるとか、そんなことを思つてるのか？つづづくバカな女だな。では、いつただつきまーす。つて、あれ？か、体が動かねーぞ。痛い痛いつ！なんだ、腕が、足が痛い！おいおい、どうして死んだあいつがいるんだ？離せ、離せよっ！

ギー、ギー、近くで音がする。体が動かねーから顔だけ後ろを向くと、墓が、倒れてきた。

痛い、痛い。ヤバイ、どうにか上半身は無事だったが、両足が墓の下敷きだ。

「……よくも、許さん」

あいつが、俺の腕を掴む。グキリ、いとも簡単に、俺の腕は折れた。

さらに、折れた腕を捩られる。ギギ、ギギ、グチャツ。

「うわあああ！腕が、もげた！おいつ、腕返せよっ！」

次は、反対の腕だ。グキリ、きちんと手順を踏む。

「やめろおおー！やめてくれえー！」

あいつが、俺に許しを乞う。ギギ、ギギ、ブチツ。ふう、これで両手とも、もげたな。

「やめてくれつ！謝るつ！謝るからつ！」

次は、首だ。だが、その前に。

「うう、うああー、うー。」

田に、石、砂を捩込む。鼻、口、耳にも、満遍なく。
そして、最後に首。

「やめてくれっ！死にたくない、死にたくないーー！」

ギギ、ギギ、ギギ、ギギ。中々もげない。ギギ、ギギ、ブチッ。

「……俺も、死にたくないつたよ」

心無し ウナギ（前書き）

心ない男のウナギの舌。

心無し ウナギ

今日も俺は、夜の街を歩く。それも表通りではなく、裏通りを。最近になつて知ったことなんだが、裏通りには、かなりの不法入出国者達が生きている。

そいつらの多くが、生きるために犯罪を犯したり、警察に捕まつてしまつたりしている。

可哀相だよな。ただ、生まれた環境が悪かつただけで、俺達だって同じ環境に生まれてたら同じようなことをしてたださつに。

おつと、子供が一人、いや二人。姉妹か。

「おい、お前ら、その生活から抜け出したいとは思わないか?」

俺が話しかけると、一人は顔を見合させた。まあ、言葉が通じないんだから、疑問に思うよな。だが。

「俺が、助けになつてやる。ついて来い」

修羅場をぐぐつて生きてきた奴つてのは、信用できる人間を直感で見分けることが出来る。

俺は、心の底からこいつらをなんとかしてやりたいって思つてゐる。それが伝わるはずだ。今までも、そうだつた。

案の定、俺が歩きはじめると、こいつらはついて来てくれた。あとは、同士達の場所へ行くだけ。それからは、こいつら次第だ。まあ、強く生きてくれよ。

傑作だよなあ。あの一人のおかげで、今日も美味しい酒が飲める。
しかしあ、毎度毎度簡単に騙されてくれるよな。
俺みたいな優しいおじさんについて来ちゃって。それまで培つて
きた経験はなんなんだよ。馬鹿だなあ。
不法入国者に、ホームレス。いなくなつたって誰も気づけない。
現に、俺はまだ捕まつていない。

内臓抜くか、風俗行きか。内臓の入れ物は、ウナギの餌にすれば
いい。

ああ、今日は内臓抜きコースじゃなかつたから、ウナギちゃん達
に餌をあげられなかつたな。

俺は優しいおじさんだからな。常にウナギちゃんの為だけに生き
ている。

あいつらが俺の本性を見抜けなかつたのは、多分。
俺が、心なしか心無しだつたからだうつな。

こたつ

今年も冬がやってきた。朝、起きるたびに寒くてつらー、布団から出たくない、という弱音と戦わなくてはならない。憂鬱だ。

しかもこの前、その誘惑に負けて一度寝して、会社に遅刻したんだつたな。

あの時の上司の怒り方、常軌を逸していたよな。あれこそストレス社会が生んだ廃棄物、つと、流石にそれは言に過ぎか。

とにかく、会社に行く準備をしないと。わい怒られるのはつんざりだ。

時間は……、あと十分くらいなら余裕があるな。まずは五分くらいこたつで暖まってから準備するとしよう。

ああ、こたつは最高だ。体が芯から暖まつていいく。

しかし、そろそろ時間だ。朝飯を食わないと。くわい、こたつから出ないといけないのか。

……いや、待て。冷蔵庫がこたつの近くにあれば、わざわざこたつから出ずには済む。今日、一回だけ苦労する」と、明日から毎日樂をすることが出来るんだ。

冷蔵庫をこたつの近くに移動させた。これで、朝飯のたびにこたつから出なくても済むぜ。

手をのばし、冷蔵庫からパンを取り出し、食べ。

パンを食べ終え、時計を見ると、会社に行かないといけない時間はとっくに過ぎていた。多分、冷蔵庫を運ぶのに時間がかかったせいだろう。

だが、今の俺にはそんなことどうでも良かった。
何故なら、気づいてしまったからだ。会社に行く必要など無いこといつことに。

俺が考えるに、人間ってのは幸せになるために生きているんだ。
そして今、俺は幸せだ。仕事を成功させた時よりも。

昼前、会社から電話がかかる。つるさーいな、俺の幸せを邪魔するなよ。

というか、よく考えると携帯、いらないよな。会社にも行かないし、誰かに連絡することもない。

無価値な存在め、折角だからこいつのエサにしてやるわ。
ジュー、とこたつの熱を出す部分に押し付ける。すると、忌ま悪まい着信音が途絶えた。こたつをまだぜ。

あれから二日が経つた。冷蔵庫の中身もそろそろ空むこ、どうしたものか？

五日が経つた。昨日から何も食べていない。腹が減った。でもい

いんだ、俺は今、幸せだし。

七日が経った。空腹だ。しかも暑いな。なんだ、この熱する部分つーかこの台なんなんだ。何故俺はこんな場所にいる？

くそっ！むかつくんだよ！ぶつ壊してやるーこの台も、この白い箱も、映像を流す箱もー全て、全て破壊してやるー許せねえ！俺を馬鹿にしやがって！

ああ、じめんなこたつ。お前は俺をあんなに幸せにしてくれたといつのこ、お前にこんな酷いことをしてしまつて。

許してくれ。俺も、すぐに逝くから。

やつぱ冬は最高だ。お客が一年間で最も多いし、アレの状態も良い。夏だったら、時間が経つと腐る場合もあるんだが、冬ならほどんど大丈夫。ゆつたりと仕事が出来る。

埋葬イズマイソウル。ああ、今日も早く死人がでないかな。そんなことを考えていると、携帯がうごめき始めた。うごめくと、どうか、振動。バイブルーション。

電話の相手は、看護婦、師の怜香さんだつた。どうやら、仕事の依頼らしい。

ちなみに、法律により、女性も男性も看護師って呼ばなきゃいけないんだよ。覚えておこづ。

病院の死体安置室、いつ見ても素敵だな。しかも、今回の死体は二人、さらに片方は美しい女性だ。ひやつほう！

一人はホームレスのおじさん。不良少年達に殺されたらしい。身寄りがが無いから俺に仕事が来たわけだ。

そしてもう一人、女性の方は、白衣の天使、怜香さんに殺されたらしい。痴情のもつれつてやつ？

警察に見つかるとヤバイから、俺の仕事。

ロツクな俺のギターケースに死体を入れ、家まで持ち運ぶ。警察に見られたらアウトだな。いや、デスマタルですつて言つたら許してもらえるかな？

デスマタルだぜ、イヤツフー！

幸い、警察に止められることもなく、無事に家まで着いた。

俺の知り合いで、死体ちゃん達をウナギのエサにする最低な奴が

いるんだけど、そいつは警察に捕まつたからな。家に帰るのもスリル満天だぜ。

いやあ、日本の警察って、優秀だからな。前住んでた国だつたら、死体と手を繋いで歩いてても金さえ払えば許してくれてたというのに。

ノーノ、ギリと針と糸、準備オッケー。昨日から冷凍保存してある死体一つに、今日の一つ、準備オッケー。
では、手術を開始します。

まずは全員の手足、頭を切断します。そして針と糸で縫い付ける。
はい終わりー！手術完了ー！

頭が四つ、手が六つ、足が六つの化け物の完成だ。
やつぱみ冬はいこよな。夏だつたら、手術が終わる前に腐つちまつし。

よし、じゃあ台の上に置いて、おーコーのトジカメのタイマーセット。はい、チーズ。

写真も撮つたことだし、そろそろこの化け物を埋葬するか。
化け物を台車に乗つせてー、るるるるるん。庭まではつこんできーましたよー。
そしたら六におつとし、ましょ。

ダンツー！

しつたいを確認しーましーたらー。あーなを埋めて、あげまーしょ。
ーれつでお仕事かんりょーですつと。

ふう、腕が六つもあるって、穴を埋めるのも簡単だな。
でもね。

なんで俺は俺を埋めたんだ？

埋葬屋（後書き）

自分は、自分ですか？

間違えて自分を埋葬しないよう、気をつけましょう。

紫の鏡

紫の鏡って知ってるか？

「の言葉を二十歳まで覚えてると、死ぬらしい。笑えるよな。そんなことあるはずがなーって。幽靈なんて非科学的な存在、あるわけないし。

それでも幽靈なんて存在を信じているバカがいるんだから、ビリしようもないよな。

仕方がないから俺が証明してやるのさ。二十歳になる時、俺が死ぬかどうか。幸いあと一時間で二十歳になる。

加藤 勝、二十歳の誕生日になるわけや。

紫の鏡、紫の鏡つと。はあ、あと一時間もあるのか。

待つの面倒だし、殺すなら早く殺してくれよ。二十歳になつてからなんてルール、守らなくていいからさ。

待たなくて、いいの？

待たなくていいって。ぷつ、実際に殺されることなんてないだろうけどね。

そういうえば、今までどうしてこんなルールを守ってたんだろう？

そんなこと知るかよ。本人にでも聞いつ。

このルールを破つてもいいなら、一時間後に殺す残りの九人。今からでも殺しに行くかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0926z/>

ホラー短編シリーズ(脳関連を除く)

2011年12月31日18時53分発行